



ムシキング
小川幸夫の

虫の世界から

農業

プロフィール
1974年、千葉県柏市生まれ。慶應義塾大学経済学部で農業をテーマに卒業論文を執筆し、卒業後は農業機械メーカーに就職する。東北の営業所に勤務した後、野菜農家の実家に就農。今年で13年目を迎える。

第8回 スズメバチも 害虫の天敵

スズメバチの繁殖の時期になってきた。スズメバチは他の昆虫の繁殖を待っていたかのように、昆虫たちが多くなった今ごろから数を増やしていく。5〜6月はアシナガバチと同様に女王蜂が単独で巣作りから産卵、子育てとすべてを行なう時期だ。女王1匹で巣作りや子育てをする姿を想像するととても涙ぐましいのだが、7月に入ると働き蜂が生まれて徐々にその数を増やしていき、人間が気づくころには少ない種類で50匹、多い種類だと2000匹の巨大な家族を作ることになる。

スズメバチは、肉食で他の昆虫を捕まえて食べてくれる益虫に当たる。また、蜜なども自分たちのご飯として食べるため、受粉の役割も果たす。筆者の畑にはたくさんスズメバチが飛んでくるが、ウリ科害虫のウリハムシをオオスズメバチが空中で捕まえるのを見てからはスズメバチがともかわいらしく思えるようになった。成虫になるとかなり無敵になってしまいう甲虫の害虫をも殺してくれる。アシナガバチとともに、食物連鎖の最上位に近い大事な益虫であり、天敵としての保護と利用ができないものかと考えている。

たくさん種類が存在する
スズメバチ

スズメバチといっても実はたくさん種類が存在する。世界一大きいオオスズメバチ、美しい大きな巣を作るキイロスズメバチ、他にもコガタスズメバチ、モンズズメバチ、ヒメスズメバチ、クロスズメバチ、チャイロスズメバチなどいろいろいる。餌として狩る昆虫もそれぞれ好みがある。害虫のヨトウやバッタからさまざまな昆虫を捕食してくれる。

巣を作る場所も個々に特徴がある。オオスズメバチは大木の根元の大きな洞に、キイロスズメバチは軒下に、コガタスズメバチは椿などの庭木の中に巣を作る。

スズメバチというと全部一緒のようなイメージを持つてしまうが、実際には生態が違って自然の中での役割分担ができてきているのだ。

スズメバチにとって
人間は非常に怖い存在、
急襲してくることはない

スズメバチというだけでも怖く感じてしまうが、単独で飛んでいるスズメバチが刺してくることはまずあり得ない。むしろ、スズメバチにとって人間は非常に怖い存在であり、わざわざ己の身を危険にさらすようなまねはしない。仮に単独で飛んでいる蜂が万一怒ったとしても、すぐ刺してくるようなことはない。

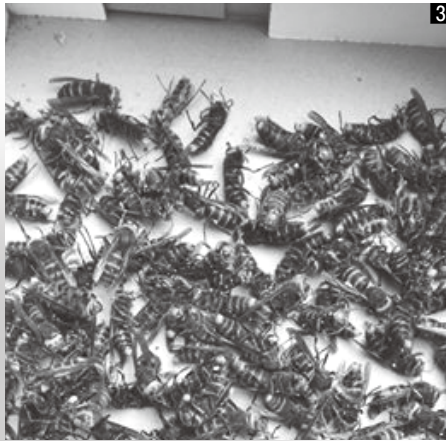
まずカチカチとあごを鳴らして威嚇してくる。次に、体当たりしてきたりもする。刺してくるのはあくまで最終手段なのだ。

筆者は年間数千匹のスズメバチを殺してしまうが、生まれてこのかた、まだ一度も刺されたことがない。スズメバチたちが本気で戦うときは、自分たちの家である巣とその中にいる仲間や子供たちを守るときだけだ。

また、スズメバチのなかで攻撃的なタイプはオオスズメバチとキイロスズメバチくらいなもので、他のスズメバチはおとなしい。スズメバチを刺激してしまうような場所に巣が作られてしまわない限り、駆除する必要はない。筆者は10月ごろからスズメバチの駆除をよく依頼されるが、まずは駆除を勧めない。特に軒下で高い位置に巣を作るキイロスズメバチなどはわざわざ刺しに下りてこないため、放っておけばいい。巣の位置を聞き、駆除依頼者が毎日通路にしなければならぬ場所に巣が作られてしまったときだけは巣ごと捕獲する。どのスズメバチも、11月すぎごろから寒さで翌年の女王蜂候補以外は自然と死に絶えてしまう。ちなみに、スズメバチを捕獲するためにペットボトルに焼酎とジュースを入れて捕まえたりする人がい



- 1 初夏までに見かける特別大きなスズメバチは女王蜂になる。最初の働き蜂は小ぶりのため、女王蜂とは大きさがかなり異なる。
- 2 オオスズメバチのオス。蜂のオスは針を持たないため、刺されない。
- 3 コガタスズメバチは1つの巣で成虫が200匹に及ぶ。幼虫とサナギも合わせるとその数は500匹ほどにもなる。
- 4 クロスズメバチは蛾の幼虫などを狩る。写真はオスのミツバチの死骸をかじっているところで、非常に大人しい。



養蜂にとつては害虫

筆者の畑によくやってくるのはオオスズメバチとキイロスズメバチだ。これは、飼っているミツバチを

る。ホームセンターにも捕獲のための資材が売っているが、まったく意味がない。反対に、その匂いで誘引してしまい、無駄にスズメバチを集めることになる。

スズメバチたちが効率的に襲えることによる。オオスズメバチは、ミツバチの成虫を全滅させてから、巣箱の中にいる幼虫を自分たちの巣へ持ち帰り、また蜜などすべてを食べ尽くす。一方、キイロスズメバチは巣箱の外で帰ってくるミツバチを待ち伏せして1匹ずつ拉致していく。つまり、養蜂にとつてスズメバチは害虫になる。

しかし、テレビなどで見たことがあると思うが、ミツバチたちも負けていない。日本ミツバチは襲ってくるオオスズメバチにしがみつき、団子状態になって自分たちの熱を利用して熱殺する。西洋ミツバチも、オオスズメバチは殺せないものの、小型のスズメバチは皆でしがみついて殺すことがある。また、西洋ミツバチの場合、養蜂家が巣箱の入口に鉄製の防護金網を張ることで守ることができる。

スズメバチは農業の財産、無駄に駆除する必要はない

都市近郊では特にオオスズメバチが駆除対象として真っ先に殺されてしまう。その影響で実はオオスズメバチを天敵とする他のスズメバチたちが繁殖している。つまり、人間が良かれと思ってオオスズメバチを駆除すると他のスズメバチたちが繁殖

し、結果的に全体のスズメバチの数が増えてしまうのだ。都市近郊でスズメバチが減らない理由はこうしたオオスズメバチの減少にあると考えられる。

そのオオスズメバチだが、営巣できるのは大木の根元の大きな洞になる。大きな木が残っているのは神社仏閣ぐらいで、ただでさえ営巣場所が近年限られているにもかかわらず、オオスズメバチを人間が駆除しまうとは何たることかと思う。オオスズメバチのおかげで、日本への西洋ミツバチの土着化も防いでいるのに……。もし、西洋ミツバチがオオスズメバチに攻撃されずに自然巣を作って越冬してしまうようになったら、日本ミツバチの生存可能な範囲は今以上に狭くなり、やがて生きていけなくなるだろう。

筆者は、頼まれてどうしても駆除しなければならぬスズメバチに関しては生け捕りにして、焼酎やハチミツ漬け、また冷凍保管している。単純に殺虫剤で殺してしまうのではなく、できれば最期は食してやれればと捕獲しているのだ。

スズメバチは、他の昆虫の数のバランスを保つ大事な存在のため、無駄に駆除する必要はない。害虫を駆除してくれる益虫であり、農業にとって財産なのだから。